

幼児のことばの発達と保育 (一)



花 上 洋 代

I はじめに

ことばの相談に連れて来られた子どもの中に、次のような子どもがいました。

Aちゃんは四歳二ヶ月。

お母さんはAちゃんのことばの発達が遅れていることを心配して相談室を訪れたのです。お母さんの話によると、

「Aは赤ちゃんの頃からとても静かで手のかからない子どもでした。ほとんど泣くこともせず、放っておいても一人で静かに遊んでいました。こちらのいうことはよくわかるのですが、二歳になってもちつともおしゃべりをしないで心配になって、『あい

うえお』をひとつひとつまねさせてことばを教えました。でもこの頃はすぐ逃げ出したり、無理に教えるとかんしゃくを起こすのです。以前は絵本を私の所に持ってきて、読んでくれとせがんだのに、この頃は絵本に見向きもしないのです。もう四歳なのにまだ五つしかことばを言わないのです」と言うことでした。

お母さん以外の人はAちゃんをどのようにみているのでしょうか。入園を希望してある幼稚園を訪ねたとき、その幼稚園の先生は次のように言ったそうです。

「Aちゃんはお名まえもまだ言えませんね。お口が遅いと他の子どもたちにかかわれりしてかわいそうだし、言いたいことが言えないのでどうしても友だちに乱暴するようになりますから、おしゃべりできるようにしてから来て下さい」

別の幼稚園の先生は、

「Aちゃんはお口が遅いのだからごあいさつは『せんせいおはようございます』と言わなくてもいいことにしましょう。『せんせい』の『せ』だけ言えばいいですよ。お歌だって皆といつしよに声を出すと楽しいし、おしゃべりが今じょうずにできなくても楽しいお遊びがたくさんあるし、お友だちもたくさんいますよ。お話だってだんだんじょうずになるでしょう」と言ったそうです。

そしてAちゃんがことばの相談に連れて来られた時のようすは次のようでした。

——母親に手を引かれて緊張したようすで入室。おもちゃをチラッと見たが、母親の手をにぎりそばにくっついて、相談者の顔を不安気に見ている。……三十分後。汽車と積木と指人形で楽しんで遊んでいる。汽車が積木の駅に着くと、アナウンスのまねをして「アウアウアウ」と声を出す。発音ははつきりしないが、声の抑揚が駅のアナウンスにとても良く似ている。お客の指人形がころげ落ちたら「チャンチャン、メーネー」（うさぎさんだめねえ）と言いながら、そつと人形の頭をなでて汽車に乗せた。母親はことばは五つしかしゃべれないと言ったが、不完全なことばを入れれば三十語以上しゃべれるように思える。とても気持のやさ

しい子どもである——

子どもはひとりなのに、みる人によって、その子どものどこをみるかによって、こんなにもいろいろな子どもの姿ができあがります。

私たちの目の前には独自の個性を持ったひとりの子どもがいます。お父さんやお母さん、先生、子どもをとりまくまわりの人々が、その子どもをどのように理解すればその子を伸ばすことができるのでしょうか。そのことを、ことばの問題を中心に、考えていきたいと思えます。

II ことばの発達

子どもはどのようにしてことばを学習していくのか考えてみましょう。ことばも他の面の発達と同様、順序性があり個人差があります。まず順序性という観点から、ことばの発達と、ことばの発達に関係の深い能力の発達を、年齢段階にそつて追っていききたいと思えます。

私の属しておりますお茶の水女子大学児童学科、言語障害研究室では今、「言語能力発達質問紙」の研究が筆者を中心に進んで

います。この質問紙はことばの発達のおくれを訴えて相談に来る子どもたちの言語能力を、分析的、総合的に知るために作られたものです。各行動項目は既存の種々の文献から拾ったものと、臨床活動の中で観察された項目から成っています。今回はまず、この質問紙の行動項目を例に挙げながら、生後一年間を前後の二期に分けて、ことばの発達過程を追っていきたいと思います。

A 生後五カ月まで

生まれてすぐの赤ちゃんは一日の大部分を眠ること、食べること、泣くことに費やしています。お腹がすいたり、気分が悪かったり、おむつがよこれたりすると泣き叫びます。お母さんはその泣き声を聞き、状況判断によって子どもの欲求を知り、満足のいくような世話をしてくれます。生後一カ月ぐらになると眼をさましている時間が増えてきます。お乳を飲んだ後や、おむつを替えた後など欲求が満足されて、機嫌のよい時に「ウーウー」「アー」などと泣き声でない発声をします。これらの発声は何らの伝達目的をもたない自発的な自己活動と言えましょう。

日が経つにつれ、泣き声でない発声は量が増え、一息の発声時間も長くなり、声の高さが変化に富む、子音と母音の組み合わせが出現するなど種類も豊かになってきます。ひとり遊びのとき、

おもちゃなどを持ちながらさかんに「ウーウー」「オーオー」など声を出しながら遊んでいます。そしてお母さんがそばにいたり話しかけたりすると、声を出すことが多くなるということもみられるようになります。

伝達目的をもたない自己活動は、発声活動以外にもあらわれます。一度頭のうしろの方にあるものを見ようとして頭をうしろにそらして以来、頭をうしろにそらすこと自体がおもしろくてその行為を楽しんでいるとか、あちらこちらを見たりお乳をもてあそびながらお乳を飲んでいる、飲むこと自体を楽しんでいるなどの活動です。

外の世界への興味は相当早くからあらわれます。一カ月頃から物や人の顔などをじっと見つめたりしますが、首がすわったり、目がよく見えるようになったり、手の運動が発達してくることも関係して、外界への興味はますます拡がり深まっていきます。外界への興味をこころみに次の二つに分けてみましょう。一つは「物」や「音」への興味、もう一つは、いつも気持のよい楽しい経験を与えてくれる母親に代表される「人」への興味です。

「物」はただ見るだけでなく、動くものを目で追ったり、注意を集中してジッと見つめたりするようになります。「音」も音源の方に首をまわしたり、オルゴールなどのきれいな音が聞こえてく

ると、それを聞いているようになります。しかしこの頃の「人」への関心は「物」への関心をしのぐように思えます。音を聞いたり物を見たりしているような時でも、人の声が聞こえてきたり、人が近づいたりすると、そちらの方へ注意が移ります。お母さんの声を聞き分けることもできるようになりますし、話しかけられるととても喜び、赤ちゃんの出した音をまねしてあげると口もとをじつと見つめたりします。あやされた時の反応も以前とちがって、あやされるのを待っていたかのように応じて笑うなど、積極的に反応するようになります。欲求を伝える信号としての「泣き声」も徐々に目的・道具的に声を使うという形に変化してきます。「ウーン」といって拒絶をあらわしたり、人に来てもらいたく、いろいろな声を出して人を呼ぶ、など対人場面で積極的に使うようになります。

以上述べましたようにこの時期の特徴は二つあるように思えます。ひとつは目的をもたない自発的な自己活動の出現であり、いまひとつは、人や物を含む外の世界への関心であります。子どもは外界からの働きかけを受け、運動能力の発達にともなって自らも外界に働きかけながら外界への関心を深め、拡げていきます。そして自己活動も徐々に「人」を意識しはじめ、人と共にいるこ

とによって伸びる自己活動への端緒が開きかけているといえます。これらの現象は後に育ってくる話しことばの最も重要な基礎になるものです。

B 生後六カ月から十一カ月まで

この時期の赤ちゃんはともおしゃべりです。食べものを吸ったり嘔んだり飲み込んだりすることがじょうずになり、発語器官の機能が発達してくるに伴い、口や舌を動かして意識的にいろいろな音を出すようになります。

ママ、ダダと、同じ音をリズムカルにくり返すなど、成人の一音節の発声時間に近い発声をするようになります。絵本をみながらひとりで意味のないおしゃべりをくり返して楽しんでいたり、何かを伝える目的ではなく、人の顔をみながらめちやくちやことばで話しかけてきたりします。以前には楽しい時に声を出していたのが、声を出すこと自体が楽しくて、いろいろな音を出し、くり返し言ってみたりしているのです。しかしながら、人がそばにいる時の方が発声活動が盛んになるという事実からも、自己活動が人との関係に伸びて行くといえましょう。

行動面での自己活動としては、机の上から同じ方式で物をくり返し落として楽しむ、などという行動がみられますが、これも物

への関心と関連して伸びて行くように思います。行為自体が楽しんでする自己活動は「技能の熟練」を結果の一部として含みますが、それが後に述べる模倣という行為に、手本との類似性という面で寄与するようになります。

零歳期の後半はまた、運動発達の著しい時期でもあります。今まで寝てばかりいた赤ちゃんは、おすわり、はいはいができるようになり、後期にはひとり立ちもできるようになります。寝たままの姿勢では見ることができなかった世界が、目の前に開けてきます。手も指もずいぶん器用に動くようになり、両手を同時に使う、手でおかしを口にもつていけるなど協応運動も発達し、外界探索の道具として有用になってきます。

これまでは主に外の世界からの働きかけを受けとることをしていたのが、このような運動能力の発達に伴い、外の世界の探索、探究、働きかけが始まります。物を振ったりぶつかけたりして音を出してみたり、とどかないところにあるおもちゃに何とかして近づこうとするなどの行動をします。おもちゃ箱をひっくり返して小さな物までひっぱり出してながめ、振ってみたりなめてみたりして、いろいろためしてみるという行動をくり返し行ないながら、外界への関心はますます深まっています。遠くに動く動物、人などもジッと見たり、音や声に聞き入ることも多くなり、何事に

も飽くことのない興味を示します。

このように外界から働きかけてくるものをいろいろと見、聞き、ためしているうちに物・音の意味、物の扱い方などが少しずつわかってきます。哺乳びんを見るとそれが食物と関係のあるものであることがわかるようになり、どびんの身とふたのようにベアになっているものについては、ベアの一方を見ると片方をさがすなどの行動が見られるようになります。また電話やめざまし時計、玄関のベルの音などが、それぞれ独自の意味をもった音として理解できるようになります。

人への関心も、一般的なものから、意味をもった特定のものへと変化します。人見知りが始まると共に「お母さん」がかけがえのない人になり、母親が手をさしのべると喜んで体をのり出すなど、「自分の要求をかなえてくれる人」として、はななく、求めるようになります。おもちゃよりも、お母さんが使っているがま口、洗たくばさみ、箱などに興味があり、お母さんに遊んでもらいたくて、禁じられていることをわざとして注意を引いたりします。

母親以外の「好きな人」への反応も豊かになります。お兄ちゃんやお姉ちゃんの遊びをジッと見ていたり、他の人が食べているのを見て欲しがったり、自分の方から顔をかくしてイナイイナイバ―をしたり、おもちゃや新聞を手あたり次第とって手わたしてく

れたり、人への関心も内容が深まり積極的な働きかけが増してきます。そして零歳時の終り頃には、欲しいもの、興味のあるものを指さすという行動が見られるようになります。これは自己と他(物)がはっきり分離したものとしてみえられていることを示すものであり、それと同時に抽象化されたレベルでの他(人)への働きかけであると言えます。

お母さんへの愛着はお母さんの声、語りかけに耳をすます態度を育て、状況に伴ったことばなら、声やことばの持つ調子から、いくつか意味が理解できるようになります。たとえばイヤイヤ、いいお顔などの芸当をしたり、自分の名を呼ばれたり、「いけません」と言われるとそれに反応したりします。そのうちババ、ブーブーなど日常目にふれ、聞かされることの多い物の名まえがいくつか理解できるようになります。そして、その物が目の前になくても、名まえを言われるとまわりをキョロキョロ見て捜す、というような行動が見られるようになります。この段階になれば、もう確かに言語を理解し始めたと言えるでしょう。

では表現面はどうでしょうか。母親の声に耳をかたむける赤ちゃんは、母親の声につられて声を出すことも増えてきます。この時期に母親は無意識のうちに子どもの声をまねしてくり返していることが多く、それをまた子どもがくり返すというプロセスです。

子どもにとって興味があり、しかもまねしやすい手本にあわせ、主体側(子ども)が自分の行動を変えていくという模倣行動がこの頃から見られ始めます。

行動面としては、お母さんのまねをしてブラシを髪にあてたり、テーブルの上をふいてみたりする行動がみられますし、音声面では、お母さんの声を直後にまねてくり返すことから、聞いて、少し時が経ってから、ひとり遊びの場面などでくり返しながら言っていることがみられるようになります。アクセント、イントネーションなどは非常にうまくまねをします。

感嘆、認識、質問、命令その他模倣により獲得したいろいろなパターンを、自発的に積極的に、ひとり遊びの場面や対人場面で見られます。機械的模倣でなく意味的模倣ができていると言えます。たとえば犬を見て「アッアッ」と言うなど、知っているものを認めて声を出したり、スリッパやおもちゃを持って歩いていき、庭に投げて「アアア、アアア」と言ったり、話しかけるような調子で語尾を上げてめちやくちやことばを言ったり、バイバイをするまねしてくり返したりします。

声を目的的に使うことも多くなり、おもしろいものを見つけたことを知らせたい時など、いかにも人の気をひくのに効果的な調子の声を出して注意をひきます。声の調子に意味のあることがわ

かり、模倣することが増えるにつれ、特定の要求を特定の音声であらわすようになります。「マンマ」と言つて食事のさいそくをしたり、自動車を指さし「ブーブー」と言つたりすることが始まります。またこの頃にはことばによる働きかけを受けとめ、ことばで返すというパターンも学習し始めます。名まえをよばれるとたまたま返事ができるようになり、子どもによつては「これはなに？」と聞かれて「ブーブー」などと答えることもできます。

また行動面においても、状況に応じて可変性のある選択的応答ができるようになります。たとえば子どもがうるさいので母親が怒つた顔を見ると、ベソをかく時もありますが、見て見ぬふりをすることもあります。このような応答における可塑性、創造性は、言語の創造的使用と関連のある問題ではないかと思われれます。

今までに述べてきましたように、零歳後期には外界への興味有一段と量的にも質的にも深まり、外界を探索し、ためすことの中から新しく模倣・表象行動があらわれ、物や音や声の調子に意味があることを知り、それらに意味をもたせて使うことができるようになります。

人や物など外界への興味は模倣・表象行動を育てる十分条件であるかどうかはわかりませんが、必要条件になっていることは確

かであると思います。そして自己活動も外界との関係で発展し、模倣によつて獲得したもの、表象性のあるものも自己活動の中にあらわれ始めます。すなわちこの時期は外界への興味と自己活動が、模倣表象能力を媒介に、徐々に統合分化されながら先へ伸びていく過程ということができましよう。

言語の二大機能—コミュニケーションの道具としての、自己表現の道具としての言語—は、生後一年内外、歩き出す前にその多くが基礎づけられると考えてよいと思います。

〈参考文献〉

- 1 お茶の水女子大学児童学科言語障害研究室
- ・ 言語能力発達質問紙・一九六九
- 2 村井潤一・乳児期の言語化過程・幼児の教育六十二巻十一号
- 3 村田孝次・児童心理学・朝倉書店・一九六八
- 4 村田孝次・幼児の言語発達・培風館・一九六七

日本幼児保育史

第一巻—第三巻（江戸時代—大正期末）
好評発売中……………以下続刊

発行 株式会社フレール館